
イナズマイレブ 3. 5 新たなる脅威

サンダースター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イナズマイレブ3.5 新たなる脅威

【Nコード】

N3734V

【作者名】

サンダースター

【あらすじ】

円堂守とその仲間たちがFFI（フットボールフロンティアインターナショナル）で優勝して1年4ヶ月がたち、円堂守は高校生になり、新たなる物語が今、始まる……

プロローグ

イナズマジャパンがF F Iで優勝して1年4ヶ月がたち、イナズマジャパンのキャプテン、円堂守はサッカーの名門校、天雷高校に入学する……。

円堂 「よしっ、父ちゃん！母ちゃん！行ってきます！」お

温子 「気をつけるのよ。」

大介 「守！ズババーンとがんばってこい！！」

円堂 「うん！じいちゃん！！」

タッタッタッ

半田 「おい、円堂！！」

円堂 「おおっ！半田！！」

半田 「また、同じだな！どうせ、サッカー部に入るんだろうけど……」

円堂 「ああ！当然だろ！！半田もだろ？」

半田 「そういうと思った！当然だろ！せっかくサッカーの名門校に入ったんだから！」

「……」 「やっぱり2人ともサッカー部に入るんだね！」

円堂 「その声は秋！」

秋 「おはよう！円堂君！半田君！」

シャドウ 「……急ぐぞ……」

半田 「シャドウもいたのか！」

シャドウ 「……そんな事より早くしないと本当に遅れるぞ。」

秋 「本当だ！急ぐよう！円堂君！半田君！」

円堂&半田 「おう！」

タッタッタッ

円堂 「あれは豪炎寺！！」

豪炎寺 「よう、円堂。相変わらずだな。」

円堂 「急ぐぞ！遅刻する！」

豪炎寺 「ああっ!!」

タッタッタ

円堂 「ふう、ギリギリまにあったー。」

半田 「あぶない所だったな！」

そして、運命の歯車は回り始める・・・

プロローグ（後書き）

はい、というわけで始まりましたがキャラの紹介をしたいと思います。
（知っている人は見なくてもいいです）

まずは、この物語の・・・あつ、正確にはイナズマイレブンの主人公、円堂守だけ紹介します。円堂は雷門中サッカー部のキャプテンで、イナズマジャンのキャプテンです。ポジションはGK^{ゴールキーパー}です。
今はこのくらいにします。それでは！

第2話 天雷高校サッカー部!! (前書き)

はい!というわけで、2話目になるわけですが、前回の円堂の説明で足りない所があったので追加します。もう一つの円堂ポジション、リベロなんです、リベロとは、ゲームや、アニメで一之瀬の説明で、イタリア語で自由な選手という意味です。今回はリベロのほうが多いと考えてください。それでは始めます。

第2話 天雷高校サッカー部!!

放課後

円堂 「サッカー部の部室はどこだ？」

半田 「さあ・・・あ！あれじゃないか？」

秋 「本当だ！あれだよ円堂君！」

円堂 「うわあ・・・近くで見るとデカイな・・・」

??? 「ねえ、君達、入部希望者？」

円堂 「うわあ！だ・・・誰ですか？」

??? 「誰ですかって・・・君達、先輩に向かってそれは無いだろう。」

円堂 「せ・・・先輩?! す・・・すみませんでしたあ!!」

??? 「ははっ!! いいって、いいって! おっと、自己紹介がまだだったな。おれは氷藤錬斗。よろしくな!! お前が円堂守か？」

円堂 「は・・・はい! そうです!」

氷藤 「ははっ、硬くなるなよ! 氣い抜けよ! 楽に行こうぜ!」

円堂 「は・・・はあ・・・」

??? 「氷藤、こんな所にいたのか。」

氷藤 「あっ、星原!!」

半田 「えっ、あの人が天雷高のキャプテン!？」

豪炎寺 「あれが・・・この学校のキャプテン・・・」

??? 「俺が天雷高サッカー部のキャプテン・・・星原望だ。」

??? 「私はマネージャーの宮野遥みやはるかです。」

星原 「氷藤、練習に2分32秒の遅れだ。ランニングは通常20週だが、おまえは35週だ!」

氷藤 「マジかよ! そりゃ無いぜー!」

宮野 「遅れたあなたが悪いんだから、反省しなさい!」

氷藤 「宮野までそんなこというのかよ! ひでえぜ!」

星原 「君達は新入部員だね。天雷高校のグラウンドに案内しよう。」

ついてくるんだ。」

円堂&半田&秋&豪炎寺 「はい!!」

6人はグラウンドに走った。

星原 「ここが、天雷高校のグラウンドだ!」

シャドウ 「遅かったな、お前ら!」

??? 「久しぶりだね、みんな!!」

??? 「守君、やっぱり来たね。」

円堂 「ヒロト、フユツペ!!」

ヒロト 「スポーツ推薦枠で、入ったんだ。」

冬花 「守君、また一諸だね。」

宮野 「全員、そろいましたので始めたいと思います。」

星原 「これより、入部テストを始める!!!」

第2話 天雷高校サッカー部!! (後書き)

今回は、雷門中、イナズマジャンパンのエースストライカー豪炎寺修也について、説明をします。(この間も書いたように知っている人は見なくていいです。)

豪炎寺の家は、妹の夕香とふくさん、父親の勝也は病院の院長です。夕香は昔の事故で1年も眠り続けていました。

まあ、こんなところでいいでしょう。ではでは!

第3話 入部テスト!! (前編)

星原 「ルールは簡単。現天雷高サッカー部にお前ら新入部員全員で挑め!! 以上だ。」

宮野 「キャプテンは円堂君、あなたです。」

円堂 「分かりました!!」

10分後・・・

宮野 「それでは、入部テストを始めます!」

ピーーーーー!!

星原 「行くぞ!! お前ら!!」

天雷高サッカー部員 「おおっ!!」

円堂 「みんな、いくぞ!!」

一年 「おおっ!!」

新入部員A 「あれが円堂守・・・」

新入部員B 「スゲーな! あいつにゴールをまかしときゃ、大丈夫だろ。」

??? 1 「チッ! 気に入らないぜ! あいつよりも俺がすごいということを証明してやる!!」

秋 「試合が、始まったよ! 冬花さん!」

冬花 「そうですね! あっ、試合が動きますよ!」

豪炎寺 「行きます! うおおっ! “真爆熱スクリュ”!!」

??? 2 「その程度じゃゴールは渡さん!! 行くぞ!! “クラッシュアーム”!!」

豪炎寺 「何!!」

シャドウ 「豪炎寺のシュートがとめられた!？」

??? 2 「行け!! 氷藤!!」

氷藤にボールが渡った。

氷藤 「行くよ! 円堂君! “コールドバースト”!!」

円堂 「うおおっ!! “ゴッドキャッチG5”!!」

その瞬間、ゴッドキャッチが凍った。

円堂 「!!!! うわぁー!!!!」

角馬 「ゴール!!! 決まっちゃったー!!! 申し遅れました!!! 私
は角馬圭太と申します!!!」

円堂 「これが高校サッカー・・・」

氷藤 「これが俺の力さ!!! こんぐらい止められないと他の奴らの
シュートなんてとめられないぞ!!」

星原 「さぁどう出る・・・」

第3話 入部テスト!! (前編) (後書き)

こんにちは。

氷藤 「こんにちはー!!」

えっ、どうやって来たの!?

氷藤 「さあ? おれにもわかんねーww」

えー、そんなに分かれよー。

氷藤 「まあー、いいや。じゃーなー!」

早っ!...まあ、いいや。

第4話 入部テスト!! (後編) (前書き)

今回は、半田の説明を・・・

氷藤 「よう! またきたぜー!!」

またお前かー!!

氷藤 「えー、きちやだめなのかよ!!」

当たり前だー!! って、もう時間だー!!

氷藤 「残念だったな☆」

お前のせいだー!! もういいや、物語をどうぞ。

第4話 入部テスト!! (後編)

半田 「マジかよ．．． 円堂の技も豪炎寺の技も通じないなんて．．．」

「あんなもんかよ・・・日本最強のFWと世界一のGKの
 フォワード
 ゴールキーパー
 ???
 実力は・・・」

「次は、俺の番だ！！」

星原 「そう簡単には破れないぞ．．．轟先輩の技は．．．」
 シヤドウ 「真ダークトルネード」！！！！」

轟は、技を使わず止めた。

「シャドウ」

轟
「そんなもんか……お前のシュートは……星原!!」

星原に、ボールが渡った。

半田 「行かせない！！」

「良いガッツだ。だが甘いな！」スターブライト

半田 「二体どこに……!! ！いつの間にあんな所に!!」

星原
「いくぞ！氷藤！！」

「OK！星原！」

星原&氷藤
「スターフリーズ」！！」

円堂 「今度こそ!!」 “ゴツドキャッチG5” !! これは!! うわあー!!」

ゴールに、星原と氷藤のシュートが突き刺さる。

45分後

宮野 「これで入部テストを終わります！！結果は明日、知らせます。今はこれで解散にします。」

星原「宮野。」

宮野「星原君。さっきの試合……」

星原 「ああ・・・2010・・・円堂守・・・もう少し骨のあるやつだと思ったが・・・」

氷藤 「そうかぁー？俺はむしろ、よくここまで喰いついたと思うぜ。去年は、30—0だったし。」

宮野 「それもそうだね。私もあの怪我さえなければ、みんなとサッカーできたんだろーな・・・」

氷藤 「あれは事故だ！現にお前は何もしてねーじゃねーか！！」

宮野 「うん・・・分かってるよ、分かってるけど・・・」

星原 「2人ともやめろ！！その話はもうするな・・・」

第4話 入部テスト!! (後編) (後書き)

今回のこの話の最後、「何これ!？」と思うかも知れませんが物語上であきらかになります。

宮野に昔、一体何があったのか?期待しておいてください。

次話をその内書きます。(笑)では!

第5話 練習試合 天雷VS帝国（前編）（前書き）

今回こそ、半田の説明をします。

半田は、何をやっても中途半端、器用貧乏です。

エイリア学園の時は、最初の試合で脱落し、円堂達の前に立ち塞がりました。

アニメでは、試合は引き分けでしたがゲームでは、勝たないとエンディングが

見られないという面倒な展開でした。エイリア学園の説明は、ヒロトの説明と一緒にします。では、話をどうぞ。

第5話 練習試合 天雷VS帝国（前編）

次の日・・・

宮野 「では、結果を発表します！まず、豪炎寺修也、半田真一！」

豪炎寺&半田 「はい！！」

宮野 「次！北御門隼人！」

北御門 「はい・・・」

宮野 「闇野カゲト！基山ヒロト！」

シャドウ&ヒロト 「はい！」

宮野 「最後に水野ラルト！円堂守！」

水野 「はい！」

円堂 「はい！」

宮野 「以上で発表を終わります。」

星原 「今、発表されたメンバーは放課後このグラウンドに集合だ。これで解散だ。」

宮野 「秋さん、冬花さんちょっと手伝って。」

秋&冬花 「はい！分かりました！」

その頃、とある場所・・・

？？？ 「フフフ・・・今に見ている、円堂守・・・」

同時刻 2時30分

半田 「いやー良かったー、無事に合格できて。」

ヒロト 「本当だね。みんな無事合格できて。」

円堂 「ああ！それに今日から練習に参加出来るんだから！」

豪炎寺 「だが、油断禁物だ。気を抜くなよ。」

星原 「来たか。お前ら。」

氷藤 「星原からなんか話があるんだと。」

星原 「そろったか。今週の土曜日に練習試合を組んだ。相手は帝国学園だ。」

円堂&半田 「て・・・帝国学園!？」

豪炎寺 「帝国学園といえば・・・あいつらと戦うことになるな。」

土曜日 帝国学園

星原 「着いたぞ。帝国学園だ。」

??? 「待っていたぞ・・・円堂。」

円堂 「お前は・・・鬼道!!!」

鬼道 「ふっ・・・こうも早く戦う事になるとはな。」

円堂 「手加減無しだぜ!! 鬼道!」

第6話 練習試合 天雷VS帝国（中編）

審判 「これより、天雷高対帝国の練習試合を始める。両チーム礼
！」

天雷メンバー&帝国メンバー 「よろしく願います！」

星原 「霊都監督、スターティングメンバーの発表を。」

霊都 「うむ。まず、FW氷藤！豪炎寺！闇野！」

氷藤&豪炎寺&シャドウ 「はい！」

霊都 「次、MF星原！半田！北御門！基山！」

星原&半田&北御門&ヒロト 「はい！」

霊都 「次、DF灯籠！円堂！水野！」

灯籠&円堂&水野 「はい！」

霊都 「最後、GK轟！」

轟 「はい！」

霊都 「以上だ。しっかりストレッチしとけよ。」

宮野 「秋ちゃん、冬花ちゃん、ハーフタイムに入った時の準備し

ところ。」

秋&冬花 「はい！」

星原 「円堂。DFだが大丈夫か？」

円堂 「大丈夫です！」

星原 「そうか。ならいいんだが・・・」

ピーーーーー！

星原 「行くぞ！」

天雷メンバー 「おおー！」

鬼道 「みんな、いくぞー！」

帝国メンバー 「おおー！」

氷藤 「行くぜ！」

不動 「行かせるかよ！“キラークラッシュ”！！」

氷藤 「うわぁー！」

不動 「鬼道！！」

鬼道 「行くぞ！佐久間！不動！」

鬼道&佐久間&不動 「“ワールドペンギン”！！」

轟 「止めてみせる！“クラッシュアーム”！！ぐ・ぐわぁー！！」

ゴールにシュートが突き刺さる！

円堂 「何て、威力なんだ！あれが今の鬼道達・・・」

半田 「今度は、こっちの番だ！うおおっー！“ライジングショット”！！」

源田 「お前のシュートなどこれで十分だ。“ドリルスマッシュV3”！ぐ・ぐわぁー！」

半田のシュートがゴールに入る。

半田 「これが今の俺の力だ！」

第7話 練習試合 天雷VS帝国（後編）（前書き）

今回は、半田がどうしてここまで、強くなっているのか、回想をどうぞ。

練習試合前日――――

半田 「うおおー！」

半田のシュートは、ポストに当たった。

半田 「惜しい！あと少しだったのに・・・」

氷藤 「へえ、面白い事やってんなー！俺も混ぜろ！」

半田 「氷藤先輩？！」

氷藤 「なあ、お前この技やってみないか？」

半田 “ライジングショット”？

氷藤 「ああ、星原が考案したんだけど、俺には合わなくて、でお前ってわけだ。」半田 「分かりました、やります。」

5時間後――――

半田 “ライジングショット”！！

氷藤 「おおっ、もう出来たのか！俺なんて丸1週間やっても出来なかったのに。」半田 「これが・・・俺の新しい必殺技・・・」
で、今に至るわけです。では、物語を。

第7話 練習試合 天雷VS帝国（後編）

鬼道 「まだ、同点だ。気を抜くなよ!!」

星原 「まだまだ、これからだ!!」

その後もお互いに気の抜けない状況が続いた。1点取っては取り返す、そんな攻防が繰り返され

45分後――

審判 「試合終了!! 10-10で引き分け! 両チーム礼!」

天雷メンバー&帝国メンバー 「ありがとうございました!!」

円堂 「半田! お前のシュートすごかったな!」

半田 「ああ、氷藤先輩と特訓して出来たんだ。」

星原 「お前ら、もうすぐFFIH予選が始まる気を引き締めていくぞ!」

円堂 「FFIHって何ですか?」

星原 「FFIH、通称フットボールフロンティアインターハイだ。FFIHは予選を勝ち抜いた上位2チームが地方大会に出場し、さらに地方大会の上位2チームが全国大会に出場でき、その中から優勝校を決める大会だ。」

霊都 「今回はイナズマジャパンのほとんどのやつらが参加するとあってメディアも大騒ぎだ。」

その頃、とある場所――

??? 「フフフ・・・あと少しだ・・・見ている円堂守・・・」

天雷高校

霊都 「星原、これで良いと思うか?」

星原 「妥当ではないのでしょうか。」

霊都 「まあ、組み合わせ次第だな。明日は必殺タクティクスの練習を中心に練習を行う。」

星原 「分かりました。では。」

第8話 円堂の“ムゲン・ザ・ハンド”！！（前書き）

天雷

ハットトリック

帝国

半田

3得点

鬼道 10得点

ハットトリック

氷藤

3得点

星原

2得点

豪炎寺

1得点

ヒロト

1得点

鬼道さんが10得点してる！！やっぱり、すごいな鬼道さんは・・

・
今回は、円堂がムゲン・ザ・ハンドの習得を目指す感じですよ（笑）
円堂は“ムゲン・ザ・ハンド”を習得出来るのか？注目です！

第8話 円堂の“ムゲン・ザ・ハンド”！！

円堂 「さーて、今日もやるか！」

ヒロト 「やるかって、何をだい？」

円堂 「何って、“ムゲン・ザ・ハンド”の特訓さ！」

半田 「“ムゲン・ザ・ハンド”？！あれは立向居だから出来た技だろ。」

ここで立向居の説明をしましょう。

ゲームやアニメでは一時期、円堂を越え最強のGKとまで言われていましたが世界編に入り弱くなり、技も破られる始末。その技の一つが“ムゲン・ザ・ハンド”です。

元々は円堂の祖父、大介が作った技で円堂も習得を目指すのですが、しなやかな筋肉が必要なこの技は何度やっても失敗していたのに対し、立向居は一回目で技を出しかけるといいう偉業をなしとげます。

アニメではG5まで行きました。（世界編終了時）今回は“ムゲン・ザ・ハンド”を習得出来なかった円堂が再び習得を目指します。

円堂 「だからこそやる意味があるんじゃないか！」

豪炎寺 「フッ、お前らしいな、円堂。」

水野 「ねえ、何やるの？」

半田 「お前は確か・・・水野！」

ヒロト 「円堂君の必殺技の特訓だよ、ハルト。」

水野 「面白そう！僕も混ぜて混ぜて！！」

そして、特訓が始まった。

ヒロト 「行くよ！“流星ブレードV3”！」

円堂 「うおおー！“ムゲン・ザ・ハンド”！ぐっ・・・うわぁー！！！」

シュートが円堂と一緒にゴール突き刺さる。

ヒロト 「大丈夫かい？円堂君。」

円堂 「ああ、何とかな。」

水野 「次は僕だよ！」

円堂 「来い！水野！！」

水野 「うん！」

すると、水野はめを閉じた。

水野 「行くぞ！円堂オォー！！！」

円堂 「！？これって！」

水野 「“アクア・ブラスター” ！！！」

円堂 “ムゲン・ザ・ハンド” オォー！ぐっ・な、なんてパワー
なんだ・・・うわぁー！！！」

シュートが円堂と一緒にゴール突き刺さる。

水野 「ふん、そんなもんか・・・」

ヒロト 「あれは、まるで・・・」

豪炎寺 「2年前の吹雪！！」

そう、水野は今2年前の吹雪と同じ状態なのです。

円堂 「・・・見えた。」

水野 「あ？」

円堂 「見えたぞ・・・俺にしか出来ない“ムゲン・ザ・ハンド”
が！！！」

第9話 冷酷な宣告！（前書き）

いやー、前は色々すごかったなー。

特に水野のもう一つの人格、気づいている人も少なからず居ると思いますが、水野はイナズマイレブン2の覚醒前の吹雪をベースにしています。

吹雪が氷なら、水野は名前のまんま水の技を使います。

ただ、水野はもう一つのをコントロール出来ているので普段はまず、使いません。

光陽高校には、驚きの奴らが！！

そして、円堂はキーパーとして試合に出られるのか？ここも注目です！

第9話 冷酷な宣告!

霊都 「お前達、来週の日曜に練習試合を組んだ。相手は光陽高校だ。」

氷藤 「光陽高校?! あそこは、去年出来たばかりの学校じゃないですか! 何で、そんなこと・・・」

星原が氷藤の話を遮る。

星原 「あそこは、まだ出来たばかりだから、データが少ない。だから、その分対策の練りようが無いと言っても言い。その為の試合と言っても良いだろう。」

氷藤 「それは良いとして、それなら1年を出さないで、俺達2年生や轟先輩3年生で試合をやれば光陽高校の実力も分かるだろ。」

霊都 「いや、お前らには悪いが次の練習試合は、1年だけで戦ってもらう。」

氷藤&星原 「?!?!」

灯籠 「監督、さすがにそれは無茶なんじゃ・・・」

轟 「灯籠の言うとおりです、監督!!! 1年は、まだ7人ですよ! こんな人数ではディフェンスが薄くなりますよ!」

霊都 「文句がある奴は抜ける。」

氷藤&星原&灯籠&轟 「!!!!」

??? 「それは無いでしょー、監督。」

氷藤 「!お前は・・・炎城!!!」

炎城 「氷藤、俺の名前覚えてくれたんだー、サンキュー。おっと、おーい着いたぞー。」

??? 1 「マモル!」

??? 2 「待てよ、フィディオー!」

フィディオ 「ごめん、マルコ。でも、マモル達と会えると思うとワクワクしちゃって!!!」

マルコ 「でも、だからってそこまで、走らなくてもいいんじゃない

いか？」

「??? 3 「全くだ。フィディオ、そんなに急がなくてもエンドウマモルは逃げやしないさ。」

マルコ 「ジャンルカの言うとおりだ！お前の悪い癖でもあるわけだし、自覚を持てよな。」

ジャンルカ 「まあ、落ち着けよマルコ。」

円堂 「フィディオ！何でここに？」

フィディオ 「日本に3年間だけ、留学する事になってね、あとアンジェロとブラージも別の学校に居るはずだよ。」

円堂 「へえ、とりあえずこれからよろしくな、フィディオ！」

フィディオ 「こちらこそよろしくね。」

第9話 冷酷な宣告！（後書き）

今回は、イタリアの少年サッカーチームオルフェウスから留学してきた、フィディオ、マルコ、ジャンルカについて説明をしたい、と思います。

というわけでまずは、マルコにに来てもらいましたー！

マルコ 「こんにちは！俺はマルコ・マセラッティ！ポジションはディフェンダーDFだ！」

マルコってパスタを生地から作る事ができるんだよね？

マルコ 「ああ！というよりパスタなら何でも作れるぜ！」

じゃあ、ペスカトーレ1つください。

マルコ 「よし！じゃあ1時間で作るぜ！」

—————1時間後—————

マルコ 「出来たぜー。」

おおっ！すごくうまそう！いただきまーす！グフツ・・・

マルコ 「大丈夫か？」

う・・・うますぎて死ぬところだった。では、次はジャンルカが来ますので待っててください。

第10話 持ち物検査（前書き）

かなり、長い期間書けなくてごめんなさい。

こっちの事情で、読んでくれてた人どうもすいません。

2，3話は、円堂達の学校生活を書くつもりです。

更新する機会がかなり減ると思いますが、いつかもののペースに戻るよう頑張ります。では、第10話です。

第10話 持ち物検査

——ファイデオ達が来て1日が過ぎた。

ファイデオ達は留学生寮に住むことになり、星原先輩や氷藤先輩とも打ち解けた感じだった。——

円堂 「おーい、半田ー！秋ー！」

秋 「遅いよ、円堂君！」

半田 「今日は、風紀委員の持ち物検査の日だろう？」

円堂 「あー！そういえばそうだった！！早く行かないと！！」

円堂は、全速力で走って行った。

半田 「ちょっ！円堂！？」

秋 「私達も、急ごう！半田君！」

半田 「・・・だな。走るか！」

——10分後——

半田 「やっと着いたー・・・？円堂？どうした？」

半田は円堂の視線に目をやった。

半田 「ま、まさか・・・」

秋 「どうしたの？2人共・・・えっ・うそ！」

そこには、宮野がいた。

秋 「宮野先輩・・・ですよね？」

宮野 「円堂守、半田真一、木野秋、8時35分到着。持ち物検査開始時間から2時間35分経過。」

半田 「はい？というより6時からやっているのか！持ち物検査は！」

宮野 「かばんを貸しなさい。」

円堂&半田&秋 「はい？」

3人が、その言葉を言った瞬間3人のかばんが無くなっていた。
円堂&半田&秋 「え！？」

宮野 「まあ、安心してすぐ返すから。」

そう言うと、3人のかばんをあさり始めた。

半田 「ちょっ、何してるんですか！」

宮野 「・・・サッカー誌に、ボールに、携帯が3人全員のかばんの中から見つかりました。」

??? 「そうか・・・とりあえず、返しておけ。」

宮野 「分かりました、諸星委員長」

秋 「あの・・・」

宮野 「ごめんごめん（笑）。とりあえず、このかばんは返すね。」

半田 「は、はぁ・・・」

宮野 「みんな、いそがなくていいの？」

円堂&半田&秋 「あ」

円堂&半田 「ヤバイ！遅刻だ！」

秋 「宮野先輩、また後で！」

宮野 「みんな、頑張ってね。」

第11話 宮野の頼み（前書き）

次話は、展開が読みにくいので、飛ばしてもかまいません。
そんな訳で、第11話スタートです。

第11話 宮野の頼み

円堂 「はぁ・・・やっと今日の練習終わった。」

半田 「光陽との試合が近いからなのか、練習が厳しくないか？」

氷藤 「それは言えてる。」

半田 「って、いつの間にいたんですか！」

氷藤 「1分くらい前。」

半田 「（早っ!!）」

秋 「円堂君、半田君早く帰ろう！」

円堂 「ああ、今行く。」

宮野 「円堂君、半田君、秋ちゃん、ちょっといいかな？」

半田 「何ですか？」

宮野 「あなた達、この後暇？」

秋 「何ですか？」

宮野 「私の家に、行って来てくれない？今日、私アルバイトだから。私の家の行き方は星原君と氷藤君が知ってるから。」

星原 「宮野、またあいつらの世話をしなくちゃいけないのか？」

氷藤 「俺は楽しいから、いいんだけどさ。」

宮野 「星原君も氷藤君も、家の状況わかるでしょ？」

星原 「それはそうだが・・・」

氷藤 「よーし、じゃあ行くか！」

———10分後———

氷藤 「ここが、宮野の家だ。」

第12話 宮野家の問題児達！（前書き）

今回は、宮野の姉、弟、妹達を出すわけですが、タイトルにあるように、問題児が多いです、というより宮野の姉以外は、基本何か問題を起こしています。

その相手をするのが、円堂達というわけです。

今回は、かなり話が壊れると思うので注意してください。

それと、最近週1，2のペースで書ける様になりました。

これから頑張ります。では、どうぞ。

第12話 宮野家の問題児達！

ピンポーン

「???」 「はーい。あ、星原君に氷藤君！いつもごめんね。」

星原 「いえ。千里さん、遥さんにはいつもお世話になっていますから。」

氷藤 「そうそう、俺なんていつも迷惑かけてますし。」

星原 「お前はかけすぎだ。」

千里 「その分なら、大丈夫そうね。あら、その子達は？」

星原 「今年の新入部員達です。」

円堂 「円堂守です！初めまして！」

半田 「半田真一です。」

秋 「初めまして。木野秋です。」

千里 「宮野千里です。よろしくね。さっそくなんだけど・・・」

「???」 「それっ！！！」

円堂 「え？うわぁ！」

円堂めがけて枕が飛んできた。円堂はそのまま、玄関に倒れた。

「???」 1 「やったあ！当たった、当たった！！！」

「???」 2 「わーい、わーい。」

「???」 3 「よーし、もう1回やろうぜ！」

「???」 4 「そうしよ、そうしよ！」

「???」 5 「いくぞー！」

千里 「やめなさい！光！美和！王鬼！真帆！美樹！」

その瞬間、千里の言葉で、一瞬で静まり返った。

円堂 「えーと、その子達は？」

千里 「この子達は、私の弟達よ。」

光 「何だよ、姉ちゃん！」

美和 「別に何してもいいじゃん。」

王鬼 「そうだそうだ！」

真帆 「自由にやっちゃだめなの？」

美樹 「ところで、その後ろにいる人は誰？ 星原さんと氷藤さんは分かるけど・・・。」

千里 「この人達は、天雷高のサッカー部の新入部員の人達よ。」

光 「え、じゃ、じゃあサッカーのキーパーやってよ！ 俺達がシュート打つからさ。」

半田 「どうする？ 円堂・・・って円堂は？」

円堂 「よーし、こい！」

光 「いくぞー！！！」

第13話 宮野の過去! (前編) (前書き)

今回から、宮野の過去に入りますが、宮野のサッカーをやっていた頃に宮野の運命を変える出来事が起こります。

3部に分かれてお送りするので楽しみにしていてください。
では、どうぞ。

第13話 宮野の過去！（前編）

光 「行くぞ！ “モノトーンショット” ！！」

円堂 「試してみるか・・・ “レジェンド・ザ・ハンド” ！」

半田 「何だ？ 円堂の周りにオーラが集まってる？」

円堂 「うおおー！ “レジェンド・ザ・ハンド” ツー！！」

その瞬間、周りのオーラが一瞬で消えた

円堂 「くっ・・・やっぱりまだ無理か・・・。」

そのまま、シュートはゴールに入った。

光 「やった、やったー！ 世界一のゴールキーパーからゴールをとったー！」

美和&王鬼&真帆&美樹 「わーい、わーい！！」

星原 「あいつらを見ていると、昔を思い出すな・・・。」

氷藤 「そーいや、あの時は宮野もサッカーをやってたけ・・・。」

星原 「あの事故からだったな、宮野が変わったのは・・・。」

～7年前～

星原 「行くぞ！ 氷藤！」

氷藤 「宮野！」

宮野 「よーし、 “リーフスパイラル” ！！！」

ゴールに宮野のシュートがゴールに突き刺さる。

宮野 「よーし、またゴールゲットー！」

??? 「また、やってるの？ 3人とも？」

星原 「よう、響子。」

響子 「本当にあなた達、仲が良いわね。」

第14話 宮野の過去！（中編）

宮野 「そうかな？私は普通だと思うけど……。」

星原 「同感だな。」

氷藤 「そうか？俺的にはすごく中のいい友達だと思うけど？」

響子 「そういえば、週末に大会があるんでしょ？」

宮野 「そうだよ。響子も来るんでしょ？」

響子 「お医者さんのOKが出ればだけど……。」

補足説明

響子は7歳の時、交通事故に遭い、それ以後両足が動かなくなり、療養を続けている。

宮野達とは、幼稚園からの付き合い

星原 「まあ、無理してこなくても、親に頼んでビデオ撮ってもらえばいいんじゃないか？」

響子 「それもそうだね、でも出来ればこの目で見たいし……。」

氷藤 「ま、どっちでもいいんじゃない？あとは、本人の意思に任せようぜ。」

宮野 「じゃあ、また明日ね。」

星原 「ああ、じゃあな。」

氷藤 「おう、じゃあな。」

（週末 病院）

響子 「じゃあ、行ってもいいんですね！」

医者 「うむ。気分転換にでもなるだろう。」

響子の母親 「じゃあ、急ぎましょう。宮野ちゃん達の試合もそろそろやる頃だと思うし。」

響子 「うん!!」

（同時刻 某所）

「……」
「分かりました。では例の時間に……ええ、分かっています。命令通り彼ら（……）を抹殺します。」

第15話 宮野の過去（後編）

～フロンティアスタジアム～

王将 「これより、ジュニアサッカークラブ、予選決勝戦を始めます！！」

説明

角馬 王将

実況・解説を（おそろく）スポーツの大会などで行っている。おこな

角馬 圭太の父親

王将 「星花FCvs蛇川FC、試合がまもなく始まろうという所、果たしてどちらが勝つのか！？」

ちなみに、星原、氷藤、宮野の3人は星花FCに所属しています。

宮野 「さーて、今日もハットトリックを決めようっと。」

氷藤 「でも、蛇川はカウンターの速さで有名だぜ？」

星原 「だが、今日は響子が来るかもしれないからな。宮野にとっては十材料だ。」

ピー 審判の笛の音がスタジアムにこだまする。

～客席 F列～

響子の母親 「ここなら、星原君達の試合がよく見えるわよ。」

響子 「うん！みんな頑張れ！！！」

～客席 出入り口付近～

??? 「あと45分か・・・指令が言うにゃ宮野って奴が脅威らしいが、どう見ても普通の女の子にしか見えないが・・・命令を遂行するまでだ。」

～スタジアム 中央～

星原 「行くぞ！みんな！！！」

スタメン 星花FC全員 「おおっ！！！！」

星原 「氷藤！」

トン

氷藤 「宮野！」

ポン

宮野 「“リーフスパイラル”！！」

蛇川キーパー 「うわぁー！！！」

王将 「決まったー！！宮野の必殺技が見事ゴール！！連携の良さ
でたー！！！」

ちなみに、この時点で19分経過

星原 「この調子で行くぞ！」

前半残り10分

客席 出入り口付近

??? 1 「作戦変更ですか？」

??? 2 「ああ、今から開始だ。見せてやれ恐怖の惨劇を！！」

??? 1 「分かりました。」

謎の男はボタンを取り出し、押した。

その瞬間

ズドーン ボカーン

会場中から爆発音が鳴り響く

響子 「何？この音？」

すると

ドカーン

響子の足元が爆発した

響子 「きゃあああー！！！！」

スタジオム

星原 「おい！今誰かの声がしなかったか？」

氷藤 「んな事言ってる場合か！早く行くぞ！！」

スタジオム 外

警察官1 「避難している人は全員か？」

警察官2 「はい！おそらくそう思われます。」

星原 「危ないところだったな。」

宮野 「寿命が縮むかと思った。」

氷藤 「おい、あれ・・・響子の親じゃねえか？」

星原 「ここにいるなら、響子も近くにいるかもしれないな。」

宮野 「響子のお母さん。響子ちゃんどこにいますか？」

響子の母親 「響子ならこの辺に・・・あれ、いないわね。」

星原&氷藤 「まさか!!！」

星原 「すみません!まだ、友達の中に!」

警察官1 「もう無理だ!完全に火の手がまわっている!!」

宮野 「いやあー!!！」

第16話 意外な来客（前書き）

すいませんが、今回は最初だけ宮野の過去を出します。
また、天雷高には意外な人物が来ます。

第16話 意外な来客

氷藤 「星原！宮野は？」

星原 「まだ、精神状態が良くないらしい。」

氷藤 「くそ！何でこんな事に！！！」

医者 「君達、あの子の知り合いか？」

星原 「？そうですか？」

医者 「あの子が会いたいと。」

　　病室　　

宮野 「氷藤君、星原君・・・」

氷藤 「大丈夫か？」

星原 「お前が戻れば、優勝は確実なんだがな・・・」

宮野 「その事んだけどさ・・・」

星原 「？」

宮野 「私、サッカーをやめようと思うんだ・・・」

星原 「！！！！」

氷藤 「何でだよ！お前はチームの要なんだぞ！！！！」

宮野 「分かってるけど！でも・・・」

星原 「分かった。」

氷藤 「星原！！」

星原 「分かってやれ。響子を失った悲しみが一番大きいのは宮野なんだ。」

氷藤 「くそ！」

　　現在　　

星原 「宮野はあの事故以来変わってしまった。」

氷藤 「でも、俺達自身も変わったんだ。」

千里 「みんな、今日はありがとう。」

円堂 「いえ！楽しかったです！」

千里 「じゃあ、またね。」

（翌日）

霊都 「今日は客が来ている。」

豪炎寺 「客？」

円堂 「！！お前はアフロディ！」

アフロディ 「久しぶりだね。円堂君。」

ヒロト 「何でキミがここにいるんだい？」

アフロディ 「キミ達に挨拶をしに来たんだ。」

豪炎寺 「まさか・・・」

アフロディ 「今週の練習試合の相手は、僕達光陽高だからね。」

第16話 意外な来客（後書き）

宮野の過去話が想像以上に長く続いてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3734v/>

イナズマイレブ3. 5 新たなる脅威

2011年11月12日15時21分発行